

「野草・影的告別」考：“行く”か“留まる”か

秋吉, 收

九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門 : 助教授 : 中国近代文学

<https://doi.org/10.15017/3416>

出版情報 : 言語文化論究. 22, pp.1-11, 2007-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

「野草・影的告别」考 ——“行く”か“留まる”か

秋 吉 収

1

散文詩集『野草』の中でも、「影的告别」（1924年12月『語絲』週刊第4期）は魯迅の内面世界を綴った特に難解と評される重要な作品である。1933年に刊行された『魯迅自選集』にも採られている¹⁾ことから、魯迅自身、自負するところがあったようだ。李何林著『魯迅《野草》注解』（1973）は、研究史上出色の業績として高く評価されるが、その「《影的告别》試解」には、次のような言葉が書き付けられている。

我所体会的全篇大意就是如此，可能不对。在《野草》二十四篇（《题辞》也算在内）中，我觉得这一篇最难懂，《墓碣文》还在其次。²⁾

“可能不对”とはいかにも不安げである。現在に至るまで数多の『野草』研究が出され、「影的告别」の読みは深められたが、幾つかの問題は未解決のままに残されている。

*

まずは「影的告别」の冒頭部分を引用する（ここでは原載誌『語絲』ではなく、2005年人民文学出版社刊、新版『魯迅全集』に拠る）。³⁾

人睡到不知道时候的时候，就会有影来告别，说出那些话——

有所不乐意的在天堂里，**我不愿去**；有所不乐意的在地狱里，**我不愿去**；有所不乐意的在你们将来的黄金世界里，**我不愿去**。

然而你就是我所不乐意的。

朋友，我不想跟随你了，我不愿住。

我不愿意！

呜呼呜呼，我不愿意，我不如彷徨于无地。

（太字、下線等は引用者による。以下同じ）

小論で特に注目するのは、下線部分、特にその最後の「**我不愿住**」である。『野草』の翻訳は多くの研究者によって試みられているが、解釈の違いを端的に示すために、代表的なものについて該

当箇所を以下に列挙してみよう。

友よ、私はもうお前につき随ほうとは思はない、私はとどまることを願はない。

(1936年、改造社版『大魯迅全集』。鹿地亘？訳⁴⁾)

友よ、私は君に従いたくない。留るのがいやだ。

(1953年、竹内好訳⁵⁾)

友よ、おれは君について行くのがいやだ。とどまることが。

(1976年、竹内好新訳)

友よ、おれはお前に添うて歩くのがいやになった、こいつはもうたくさんだ。

(1963年、木山英雄訳⁶⁾)

友よ、私は君について行きたくない。留まっていたくもない。

(1967年、高橋和己訳⁷⁾)

Friend, I'll no longer follow you; I do not want to stay here.

(1976年、外文出版社刊『WILD GRASS』⁸⁾)

友よ、おれは君についていたくない。おれはここに居たくない。

(1978年、駒田信二訳⁹⁾)

友よ、わたしはおまえについて行きたくない。そこに留まるのはいやだ。

(1985年、学研版『魯迅全集』。飯倉照平訳)

友よ、おれはおまえについて行くのがいやになった。おれはおまえのもとにいたくない。

(1997年、丸尾常喜訳¹⁰⁾)

代表的なものと言いながら多くなったが、すべてを挙げたわけではない。「朋友，我不想跟随你了，我不愿住。」というたった一文の読みがこれほど多岐にわたることからも、魯迅ひいては『野草』に対する先達の熱き思いを感じ取ることができよう。前の部分「不想跟随你了」に注目すると、まず「跟随」を「ついている」とする駒田氏の訳が気になるが、やはり「付き従う」「ついて行く」にとりたい。最後の「了」を訳出するかどうかで二種に大別できるが、変化の「了」であるからやはり「・・になった」「no longer・・」と訳すべきと考える。

さて、小論で問題にするのは次の一文「我不愿住」である。特に、最後の一文字「住」については解釈が大きく分かれている。そもそも魯迅の原文がかなり唐突である。「もはや君について行きたくなくなった」と言った後に、「住」したくないと来て、「どうして」とも「どこに」とも具体的な説明はないのである。最初の『大魯迅全集』とそれに続く竹内好の訳はいわば直訳であり、もちろん誤りはない。だが考えようによっては「住」の解釈を避けたと言えるかもしれない。その後の研究者たちはこの「住」をきちんと解釈しようとした。木山氏の「こいつはもうたくさんだ」は、表面的には一番避けているかの印象を与えるが、無論そうではない。そのことはまた後で取り上げることにして、それ以外の解釈は「住」する場所をどこに定めるかによって、大きく三種に分類できるようだ。「ここ」か「君（おまえ）のもと」か、「それ以外もしくははっきりしない」の三種である（原文にないものを付加することに議論はあろうが）。日本の研究に数倍する中国の『野草』研究を辿っても、やはり日本同様「住」の解釈は一定しない。誤解を恐れずに言えば、この部分の解釈については敢えて問題にしないものが多いのである。

2

「影的告别」は、1924年12月8日『語絲』第4期に初めて掲載されるが、この原載誌の当該部分を確認すると、驚くべきことに、これまで見てきた「朋友，我不想跟随你了，我不愿“住”。」の「住」は「往」となっている（小論末尾掲載写真参照）。つまり、「友よ、僕はもう君について行きたくなくなった」、「僕は行きたくない（我不愿“往”）」となっているのだ。

この異同については、管見の及ぶ限り従来の研究の中で指摘されたことはない。見てきたように数多の『野草』研究、翻訳に際して参照されるテキストはすべて「不愿“住”」に作る。可能性としては、明らかな誤植と判断され敢えて無視されたか、あるいは見落とされたかの両方が考えられるが、多くの研究は（或いは資料的制約から）原典の『語絲』にまで遡ってはず、そもそも異同に気付いてはいないと考えられる。

また、「住」と「往」は字形が極めてよく似ており、1920年代の雑誌『語絲』に印刷された文字は小さい上に鮮明とは言えない状態で、見落としの可能性も十分にあり得よう。丸尾常喜氏の研究書『魯迅『野草』の研究』（1997）には、各篇の注釈の後に「校異」の欄が設けられ、初出誌『語絲』と1981年人民文学出版社版『魯迅全集』との異同を丹念に拾われているが、やはり「往」と「住」の記載はない¹⁰⁾。

一方、明らかな誤植と認識され無視された向きも否定できないと考える。ただ、「不愿住」の「住」の解釈がこれだけ揺れていることや、「不愿“往”」と置き換えても意味が通じることを考え合わせるに、従来の研究の上に、異同について一度として言及がないのは物足りなさを感じず。字形は極めて似ていながらも意味は正反対の「住」と「往」の二文字、一般的にはどちらかが誤りですぐに解決しそうなものだが、文意は当然全く異なりながらも、どちらの字を当てはめても文脈をなすこと自体、とてもミステリアスである。魯迅の仕掛けた悪戯かとも疑ってしまいそうなこの問題、一考の価値はありそうだ。

*

中国における『野草』研究の第一人者、孫玉石氏は「《野草》重積」（1996）の中で、この部分について次のように述べている。

“影”不愿跟随“形”——“你”或“你们”而前往了。它有自己的哲学支配自己的行动¹¹⁾。

孫氏は無論「不愿“住”」をテキストとされているので、ここで言う「(不愿) 前往」は、「不愿“往”」の解釈ではない。原文の「不想跟随你了」をこのようにやや広げて説明されていることは了解される。ただ、孫氏の『《野草》研究』（1982）でもこの『重積』でも、「不愿住」についての具体的な言及は全く見当たらない。この後の部分では、影がなぜ「君に随って」天国、地獄、黄金世界へ行きたくないかの理由が詳細に述べられている。

中国における『野草』研究の蓄積から、もう一例参照しよう。石尚文、邓忠强著『《野草》浅析』（1982）の「《影的告别》浅析—毅然向旧我诀别」には、次のようにある。

“影”在坚决弃绝那个它所曾经生活的黑暗现实的同时，对和那个现实有着深刻联系的旧我——“你”，不得不毅然决然地宣告决裂：“你就是我所不乐意的”，“我不想跟随你了”。“影”不愿到“地獄”和不愿与旧我——“你”同往，乃至要“彷徨于无地”，表现得如此坚决，¹²⁾

ここでも、比較的理解の容易な「不想跟随你了」を説明されるばかりで、「不愿“住”」について

の具体的な説明は行われていない。

だが、以上の例からも確認できるのは、テキストが仮に本来「不愿“往”」（「朋友，我不想跟随你了，我不愿“往”。」）であったとしても解釈に窮するほどの矛盾は感じられないことである。却って表面上の意味はとりやすいかもしれない。「跟随」「往」とすれば、動線の流れもスムーズである。影が君について行くことを拒否する目的地として、天国や地獄や黄金世界を想定することは従来の研究においてほぼ一致している。「友よ、僕はもう君について行きたくなくなった、僕は（天国や地獄や黄金世界のような所には決して）行きたくないんだ」となろうか。孫玉石氏の説明にある「它有自己的哲学支配自己的行动」によって些か拡大解釈するならば、影の意図する方向はもう少し広がりを持つと考えた方がいいかもしれない。

この「往」について、魯迅の他の著作の中から、相似する用例、例えば「跟随」と「往」が連続して出現する箇所等がないか探してみたが、同様の例は見つけることができなかった。参考まで、やや似た表現を紹介しておく、1934年5月16日付「鄭振鐸宛」書信の中に、“我在《野草》中，曾记一男一女，持刀对立旷野中，无聊人竟随而往，以为必有事件，慰其无聊，”¹³⁾との言葉が見える。同じ『野草』の「復讐」について述べた一節である。また、魯迅が「影的告别」を『語絲』に掲載したちょうど半年後の1925年6月、『莽原』周刊第8期に「田園思想」と題して掲載された往復書簡の、魯迅から青年に宛てた手紙の中に、“倘有领人向前者，只要自己愿意，自然也不妨追踪而往；但这样的前锋，怕中国现在还找不到罢。”¹⁴⁾とあり、この用例は「愿意」との絡みも含めて内容的にも接近している。

ここで、試みに魯迅の文章に出現する「往」を機械的に拾い出してみると、日記、書信を除く全作品集集中に508例認められ、うち半分は「往往」(241例)で、「往昔」「已往」など過去を表す語彙(56例)、「往来」「過往」などの行き来の意味(51例)、その他「神往」「勇往」等(53例)、残りが介詞または動詞として「～へ」「行く」の意味である(107例)。その中でも「行く」の意味で単独動詞として「往」が使用される例は少数で、「去」の方が圧倒的に多い¹⁵⁾。仮に、魯迅が「我不想跟随你了，我不愿“去。”とせず敢えて「不愿“往”」に作ったとすれば、その前の部分で「不愿“去”」を三度連続して使用しているので重複を避けたことや、何らかの意識が働いていたと推測される。

さて、初出誌『語絲』が「不愿“往”」と作ることに則して考察を進めてきた。この発見によって「影的告别」の難問が一つ解消できるならば嬉しいが、ことはそう簡単ではない。以下、「往」のアドバンテージを脅かす幾つかの問題を提示する。

まず最大の脅威は、押韻の問題である。『野草』のある部分に押韻が意識されていることについては既に指摘がある。李国濤「苦悶的“象徴”——《野草》芸術談」(1982)では、まさに「影的告别」が対象とされている。

- ・・・他在《野草》中对声调、音韵是非常讲究的。请仔细读一读《影的告别》，注意它的韵脚：
我不愿意！
呜呼呜呼，我不愿意，我不如彷徨于无地。
我独自远行，不但没有你，并且在没有别的影在黑暗里。只有我被黑暗沉没，那世界全属于我自己。¹⁶⁾

引用部分、「影的告别」末尾四行について、下線太字はすべて韻尾「i」で押韻されている。押韻を考慮しつつ、「朋友，我不想跟随你了，我不愿往（往）」の聯を眺めれば、「去」「去」「去」「的」「往」「意」「地」と、すべて去声音で統一されていると読める。「往」は介詞（～に向かって）なら

ば去声に読めるが、動詞は上声に読むのが正音である。時代は近代でしかも散文詩なりとは言え、これはかなり「往」の旗色が悪い。

もう一点は初出誌『語絲』及び版本に関わる問題である。前出、孫玉石氏の『《野草》研究』「附録一」『《野草》修改蠡測』から引用する。

在集印成书时,鲁迅对《语丝》上发表的多数篇章,在文字上曾作了一些有意义的改动、加工和润色。《野草》全书修改大约近二百处。这些修改,大体上有四类情况:一,订正《语丝》发表时排印的错误;···¹⁷⁾

管見の限り、『野草』の版本は、初出誌『語絲』を除いてすべて「不愿“往”」となっている。孫氏の言に拠れば、『語絲』よりも単行本の方が信憑性は高いということになる。多くの版を重ねた『野草』にももしも誤植があれば、その時点で鲁迅が訂正しない筈はない。ただ、孫氏の記述をもう一箇所借りると、

···《野草》在《语丝》上发表的时候,确实存在一些误排或漏排的现象。对于其中有的明显的错误,鲁迅是曾经予以更正了的。如在《好的故事》一篇发表的时候,曾有几个脱漏字。在下一期的《语丝》杂志上,便出现了这样一条《更正》:

《好的故事》正误:十二行乌下脱相字;十五行浆误浆;廿六行缕上脱如字;末行的下脱夜字。《更正》所列的几个内容,在《野草》成书时都已改正过了。唯“如缕缕的胭脂水”一句,仍缺“如”字,一直延续至今。这可能是鲁迅自己的一个疏忽罢。

『語絲』の上に、「朋友,我不想跟随你了,我不愿“往”。」についての“更正”記事は見当たらない。しかしすべての誤植がアナウンスされているわけではないから、鲁迅が「往」を問題なしと認めたことには必ずしもならないだろう。あるいは鲁迅が『語絲』編集部に渡した原稿は間違いなく「不愿“往”」であったが、その後『野草』を出版するに当たって鲁迅自身が「不愿“往”」に改めたとの推理が成り立つかもしれない。いずれにしろその後の改版でもずっと「不愿住」のままであるところに、鲁迅の意図、つまり「不愿住」を最終的には選び取ったと見るのが自然であろうか。初出誌がなぜ「不愿“往”」と作るかの真相については謎とせざるを得ない。

3

ここで改めて「不愿“往”」を前提に、冒頭で触れた各氏の解釈を検討しつつ考察していきたい。「往」の解釈として最も理解しやすいのは、丸尾氏訳に代表される「君(おまえ)のもと」説であろう。「おれはおまえについて行くのがいやになった。おれは**おまえのもとにいたくない**。」である。

押韻の指摘でも参照した李国濤氏は、その著「《野草》芸術談」(1982)の中で、明確にこの「身上」説を打ち出している。

“朋友,我不想跟随你了,我不愿住。”这也是要“驱除旁人”,希望别人“不复再来”。在这里,“**我不愿住**”是什么意思?以前少有人论及。不愿住,是不愿止住。**不愿止于何处?不愿止于“朋友”身上**,而这“朋友”所熟悉的无非是去天堂、地狱和将来的黄金世界的路。“我不愿住”,是不愿随同你们一起走这三条路。

このように「住」を「君（朋友）のもとに留まる、一緒にいる」と意味を補足しつつ解釈すれば、前の部分「不想跟随你了」と何ら矛盾しないことになる。

「住」を「君（朋友）のもとに留まる」と解することは、影本来の姿へ回帰させる道筋でもある。王瑤が「論《野草》」（1961）の中で、“形影本来应该不分离的，但影竟然要告别了”¹⁸⁾と言うように、影はそもそも自分で行動する存在ではないのだ。詳細は後述するが、動詞「住」は魯迅の文章の中でも「住む」の意味で登場することが圧倒的に多く、「住」をいわゆる“留まる”の意味で単独の動詞として魯迅が使用した例はほとんど見当たらない。影のあり方から考えれば、「君に“留まる”」と訳さずとも「君に“住む”」でもよいのではないか。

参考まで、「君のもとに」住」説に与する他の日本語訳を挙げておくと、片山智行氏の『魯迅「野草」全訳』（1991）が、“おれはいっしょにいたくない。”とし¹⁹⁾、工藤貴正氏も論文の中で、“おまえに留まりたくない。”と訳されている。²⁰⁾

次に、小論冒頭で保留にしていた木山英雄氏の訳、「こいつはもうたくさんだ」を確認しておきたい。木山氏は『魯迅研究』第25号（1960.1.31）に、「野草」会談記録として次のような説明を書いている。

☆（朋友、我不想跟随你了、）我不愿住：「住」は本と一つの場所に留まる意味だが、こゝでは一つの状態を持続する意味で、「（友よ、私はお前について行きたくないのだ）そういう状態を続けるのはもう沢山だ。」ということになる。「お前と今まで一緒に来たがもうついて行きたくない。といつてこの地点にひとり留まつているのもいやだ」とする異説も出たが、私は決してそんなことはないと思う。

論旨は明快である。“「お前について行く」状態を続けるのが嫌”なのだ。とすれば、“君のもとに”留まる」説にはほぼ通ずる解釈とみてよさそうだ。だが魯迅の「住」の用例から考察すれば、木山説は語法的にはやや無理がある。例によって、魯迅の作品集中に出現する「住」を拾い出してみると、全部で604例を数える。そのうち、動詞「住む」の意味で用いられるもの（「居住」「安住」等の熟語動詞、「住址」「住所」等の名詞化されたものを含む）が216例を数えるが、多数を占めるのは「住む」ではなくて、木山氏の提示する「状態の持続」もしくはいわゆる「安定、固着」の意味で、総数361例にのぼる。ただし、その361例はすべて「抓住」「站住」「記住」のように結果補語として動詞の語尾に付随して出現するのである。「住」一文字で動詞として用いられるのは前述の如くほとんどが「住む」であり、ごく少数の「やめる、停止する」の意味の動詞も見える。ただそれも「一件小事」の“風全住了，路上还很静。”や、『集外集』に収める詩「他」の、“太陽去了，‘知了’住了”（セミが鳴きやんだ）等、数例を数えるのみ。「住」一文字で「状態の持続」を表す用例は、管見の限り一例も確認することが出来なかった。詩の訳であるから、杓子定規に考えてはいけなかもしれないが。

さて、次に考察するのは、「“ここに”留まる」説である（木山氏はこの説についてはキッパリと否定されている）。

「ここに」説は実は少々複雑で、一括りに解釈することはできそうにない。まず冒頭に引用した例を確認しておく、

友よ、私は君について行きたくない。留まっていたくもない。

（1967年、高橋和己訳）

Friend, I'll no longer follow you; I do not want to stay here.

(1974年、外文出版社刊『WILD GRASS』)

友よ、おれは君についていたくない。おれはここに居たくない。

(1978年、駒田信二訳)

加えて二例を挙げてみる。

友よ、私はお前さんについて行こうとは思わない、私は^{とど}止まりたくない。

(1953年、小田嶽夫、田中清一郎共訳²¹⁾)

友よ、おれは君の後について行こうとは思わぬ。おれは止まりたくはない。

(1983年、相浦杲訳²²⁾)

まず、駒田訳は「ついていく」と訳すことに特徴があるが、もしそう読むなら、「君」は停止した存在とみることができ、「“ここ＝君のもと”にいたくない」折衷説ということになる。あるいは駒田訳は、「不愿住」を「ここに居たくない」と訳した時点で、「不想跟随你了」との齟齬が気になり、それに合わせる形で「不想跟随你了」を「君についていたくない」と訳してしまったのかもしれない。

高橋訳は、「ついて行きたくない」と宣言した上で、「留まること“も”したくない」と言っているのだから、「ついていく」と「留まる」は切り離されたものと解釈できる。だがこの“も”を単なる強調ととれば「(君のもとに)留まっていたくなんかないんだ」ともとれよう。前後の高橋訳を確認すると、「さて君こそが私のいやなものだ。／友よ、私は君について行きたくない。留まっていたくもない。／私はいやだ。／ああ、ああ、私はいやだ。虚空を彷徨っていたほうがました。」私感であるが、最後の“虚空(原文“無地”)”に注目し、君について(向こうへ)いくことも、(ここに)留まることもしたくない。だから影にはいる場所がなくなる。つまり虚空を彷徨うことになると読んでおく。

新たに挙げた二例は、いずれも「止まりたくない」であるから、「君のもと」と言うよりは「ここに」の方が自然であろうか。また英訳は、明らかに「ここに留まりたくない」と読める。「follow you」も動きを表すと考えて問題ないだろう。²³⁾

高橋訳のところでも触れたが、「ここに”説」では、「不想跟随你了」から「不愿住」への流れがスムーズにいかない。「君のもとに”説」が丸く収まるのに比べると、かなり厄介だ。「君について行きたくなくなった」と「(ここに)留まりたくない」、意味的に相対するものを何の説明もなく並べれば違和感が生ずるのは当たり前である。高橋和己訳が“も”を挿入することによってかろうじて意味上の並列関係を表したように、原文にも「可是」や「也」などの説明装置を挿入するのが自然ではないか。こうした文章上の問題点からも、「ここに”説」を採用しない方が“スムーズ”である。

だが、高橋訳を検討したところでも書いたように、「ここに”説」にも見るべきはあると考える。「君のもとに”説」では、「君につき随ってずっと君のもとにいる」ことを願わないのであるから、逆に言えば「君と一緒にいさえしなければそれでいい」とも読めることになる。つまり留まってここにいてもいいし、影の存在できる場所が残されているわけだ。しかし、「朋友，我不想跟随你了，我不愿住。」と宣言した後で、影は言う、「我不如彷徨于无地」(地の無いところを彷徨うほうがました)と。「さまようべき場所はない」、影は敢えて退路を断っているのだ。

実はつとにこのように考えた人が、先の木山氏と同じ魯迅研究会のメンバーにいた。それは竹田晃氏である。『魯迅研究』第24号(1957.10.20)掲載、同氏の「さまよえる精神のつばやき—「影

的告別」と「希望」から」より引用する。

「影的告別」の中には、人間として、常識的に選択できる二つの命題を、共に否定し去つて、その中間にさまよう心があつかわれている。「天国」と「地獄」。「ついてゆくこと」と「留ること」。「自分を吞んでしまう暗黒」と「自分を消すかもしれぬ光明」。結局そのいずれをも選ばぬ魂に残された場は「無地」でしかない。

「影」（魯迅）の自分でも捉え難い矛盾した感情、錯綜した心理をより如実にあらわすのは「“ここに”説」の方かもしれない。推測の域を出ないが、普通でない文章表現も敢えて狙ったものかもしれない。

さてここで、『故事新編』「鑄劍」（1926）から、“黒い男”が眉間尺に向かつて、自分に仇討ちを任せるかどうか選択を迫る言葉を引用する。

“你不要疑心我将骗取你的生命和宝贝。”暗中的声音又严冷地说。“这事全由你。你信我，我便去；你不信，我便住。”²⁴⁾

“信ずるなら（王を殺しに）行くし、信じないなら俺はやめる（留まる）”。「行く」か「やめる（留まる）」か。二律背反の構図はあたかも「“ここに”説」で見た“影”が「おまえについて行く」か「（ここに）留まる」かの構図によく似ている。そのすぐ後で“你的就是我的”（おまえの（仇）はすなわち俺の（仇）だ）と宣う“黒い男”はある意味眉間尺の分身でもあるのだ。まさに“影”のごとき存在である²⁵⁾。「影的告別」と、興味深い相似をなしている。

最後に“はっきりしない”説について。飯倉照平氏の訳““そこ”に留まるのはいやだ”は一見曖昧である。だが、「そこ」であるから既出の部分、つまり「君」および君を取り巻く（未来をも含んだ？）環境を指していると解釈できそうだ。「君のもとに”説」の拡充版と理解しておきたい。『大魯迅全集』や竹内好の直訳が“はっきりしない”ことについては、何も言うすべはない。まさに原文の通りである。いかに優秀な意識も直訳にはかなわない。

4

「不愿住」の解釈について、“異端の説”とも呼べる少数派の意見も紹介しておきたい。まずは、関抗生著『地獄辺沿的小花—魯迅散文詩初探』（1981）から引用する。そのユニークな視点で定評のある該書は、実は「不愿住」に初めて明確な説明を与えていた。

“影”，由于不愿由昏睡而灭亡，于是就向正做着酣梦的昏睡者“告别”：

朋友，我不想跟随你了，我不愿住。

“**不愿住**”就是不愿昏睡、停顿。“影”不安于“明暗之间”，要和昏睡其间的人们告别，深刻地反映了鲁迅对由于资产阶级革命的不彻底而带来的社会停滞的不满。²⁶⁾

「影的告別」の冒頭、「人睡到不知道时候的时候，就会有影来告别，」に基づき、“おまえと一緒に寝ているわけにはいかないんだ”とは、前後の繋がりが少々気になるものの斬新な解釈である。『『呐喊』自序』の鉄の部屋の記事に着想を得ているのかもしれない。

さて、最近の流行はやはり“恋愛”ネタである。その傾向の研究書が2000年から立て続けに三

冊出ている。先鞭を付けたのは、カナダ在住の中国人研究者、李天明の『難以直說的苦衷—魯迅《野草》探秘』(2000)であった。

・・・散文诗中“朋友，我不想跟随你了，我不愿住”和“绝不占你的心地”的内涵是高度私隐的，尤其是一个“住”字，又泄露了鲁迅“人”的而不是“影”的血肉。

鉴于以上的分析，我将《影的告别》解释为鲁迅潜意识里对妻子的告别。²⁷⁾

とこんな調子である。だがこの説はかなり大きな影響力を持ち、劉彦栄著『奇譎の心霊図影—《野草》意識与無意識関係之探討』(2003)という亜流を生み、また胡尹強著『魯迅:為愛情作証——破解《野草》世紀之謎』(2004)では、「告别」の対象は朱安ではなく、許広平以外にあり得ないことを“極めて緻密に”論証されており²⁸⁾、題名に負けることなく相当「面白い」。歩く人が多くなればこれもまた道になるのであろうか。

*

小論では、諸説紛々たる「影的告别」の読みの可能性について、従来の研究に見落とされてきたテキストの問題を端緒として考察を試みた。初出誌『語絲』と単行本『野草』の間の“往”と“住”、わずか一画の相違は、実は極めて象徴的な意味を有している。“行く”か“留まる”かの問題は、逡巡する影のありようそのものなのだ。それはすなわち当時の魯迅自身の姿であった。

注

- 1) 『魯迅自選集』1933年3月、上海の天馬書店より出版。『野草』からは7篇採られ、「影的告别」以外の6篇は、「好的故事」「过客」「失掉的好地獄」「這樣的戰士」「聰明人和傻子と奴才」「淡淡的血痕中」である。
- 2) 李何林著『魯迅《野草》注解』(1973年、陝西人民出版社)、35頁。
- 3) 2005年刊行、新版『魯迅全集 第二卷』(人民文学出版社)、169頁。「影的告别」については、1981年版と比較して全く変更はない。付された注もやはり“惟黑暗与虚无乃是实有”の言葉で有名な許広平に宛てた手紙だけである。
- 4) 改造社版『大魯迅全集』に記者名の注記はないが、『野草』「解題」を鹿地亘が書いていることから、翻訳も彼によるとみるのが一般的だが、例えば竹内好は『ユリイカ』1974年4月号の橋川文三との対談の中で、鹿地訳に疑問を呈している。「訳すのは多分鹿地さんでなくて誰かが下訳をやっているとわたしは推察しますね。鹿地さんにしろ、当時の鹿地さんの奥さんである池田さんにしろ、中国語が訳せるとは思えない、当時この二人の名で出ているのはひどいものだった。だから、これは誰かがやっているとと思う。」
- 5) 竹内好旧訳は、1953年、筑摩書房刊『魯迅作品集』、1956年、岩波書店刊『魯迅選集 第一卷』、1966年、筑摩書房刊(筑摩叢書65)『魯迅作品集2』いずれも同じだが、初出の1953年『魯迅作品集』だけは、「留る」にルビ「とどま」がつかない。新訳は、『魯迅文集 第二卷』(1976年、筑摩書房)。
- 6) 木山英雄訳 1963年、平凡社刊『中国文学選集第2巻 魯迅巻』136頁。1971年再版本『中国の革命と文学 魯迅集』も同じ。

- 7) 高橋和己訳 『世界の文学 47 魯迅』(1967年、中央公論社)、164頁。
- 8) 英語訳『WILD GRASS』「影的告別」は、「The shadow's Leave-Taking」と訳される。なお、1976年版は完全な英語版だが、同じ外文出版社の2000年初版、漢英対照本も該当部分は全く同じ。楊憲益、載乃迭訳。
- 9) 駒田信二訳 1978年、『集英社版 世界文学全集 72』、98頁。
- 10) 丸尾常喜訳 1997年、汲古書院刊『魯迅『野草』の研究』、55頁。「校異」の欄では、例えば第一篇「秋夜」の中で正しくは「砍斷」を初出の『語絲』が「吹斷」としたり、「失掉的好地獄」で「地上」を「地土」と作る明らかな誤植や、「過客」における「驚懼」(『語絲』)と「驚惧」(人民文学81版)の字形の違い、更には句読点の異同、改行の有無に至るまで綿密に校訂されていることから、やはり見落とされたのではあるまいか。
- 11) 孫玉石「『野草』重積 關於《影的告別》」(1996年2月『魯迅研究月刊』)、『現實的与哲學的——魯迅《野草》重積』(2001年、世紀出版集團上海書店出版社)、29頁。
- 12) 石尚文、鄧忠強著『《野草》淺析』(1982年、長江文芸出版社)、19頁。
- 13) 「340516 致邦振鋒」『魯迅全集第13卷 書信』(2005年、人民文学出版社)、105頁。
- 14) 「田園思想」『魯迅全集第7卷 集外集』(2005年、人民文学出版社)、89頁。
- 15) 日記に目を転ずると、逆にほとんどの場合「行く」の意味で「往」を用い、「去」はごく少数である。また、文章の性格上、「往往」は皆無となる。日記中に出現する「往」は3416例!で、北京時代には「往瑠璃廠」「往大學講」、上海時代には「往内山書店」「同広平往」等が頻出する。
- 16) 李国濤「苦悶的“象徴”——《野草》芸術談」1982年2月『文学評論叢刊』第11輯。同論文は同氏著『《野草》芸術談』(1982年、山西人民出版社)に収める、97頁。その他、『野草』の押韻について指摘するものに、張徳強「《野草》与象徴主義」(浙江魯迅研究学会編『魯迅研究論文集』[1983年、浙江文芸出版社]、444頁)、李国棟「《野草》与《夢十夜》」(『魯迅研究資料 22』[1989年10月、中国文聯出版公司]、299頁)がある。
- 17) 孫玉石著『《野草》研究』(1982年、中国社会科学出版社) 345～346頁。
- 18) 王瑤「論《野草》」(1961年筆)『魯迅作品集』(1984年、人民文学出版社)、135頁。
- 19) 片山智行著『魯迅『野草』全訳』(1991年、平凡社【東洋文庫】541)、34頁。
- 20) 工藤貴正氏「もう一人の自分、「黑影」の成立(上)——魯迅『鑄劍』の形成に至る「復讐」「預言」の具象性と「影」の心象性について——」(1995年1月『学大國文』第38号)、290頁。
- 21) 小田嶽夫、田中清一郎共訳『魯迅選集 創作集1』(1953年、青木書店)、39頁。
- 22) 相浦杲「魯迅の散文詩集『野草』について——比較文学の角度から——」(1983年筆) 同氏著『中国文学論考』(1990年、未来社)、113頁。
- 23) 英訳と言え、魯迅自身が序文を書き、1932年に出版予定であった『《野草》英訳本』が想起されるが、日本の侵略戦争たる一・二八上海事件の戦火のもと商務印書館とともに灰燼に帰したことは残念である。魯迅も確認したであろう英訳は「不愿住」をどう訳していたであろうか。
- 24) 『魯迅全集 第2巻』(2005年、人民文学出版社)、441頁。
- 25) 工藤貴正氏「魯迅『鑄劍』について——「黒色人」の人物像に見る「影」のイメージ」(1992年、『相浦杲先生追悼中国文学論集』所収)及び、前出注19に連なる同氏の研究からご教示を得た。
- 26) 閔抗生著『地獄辺沿的小花——魯迅散文詩初探』(1981年、陝西人民出版社)、25頁。
- 27) 李天明著『難以直說的苦衷——魯迅《野草》探秘』(2000年、人民文学出版社)、123頁。
- 28) 胡尹強著『魯迅:為愛情作証——破解《野草》世紀之謎』(2004年、東方出版社[北京])、59～64頁。

日 八 月 二 十 年 四 二 九 一 (期四第)

有所不樂意的在天堂裏，我不願去；有所不樂意的在地獄裏，我不願去；有所不樂意的在你們將來的黃金世界裏，我不願去。然而你就是我所不樂意的，朋友，我不想跟隨你了，我不願往。

我不願意！

嗚呼嗚呼，我不願意，我不如徬徨於無地。

我不過一個影，要別你而沉沒在黑暗裏了。然而黑暗又會吞併我，然而光明又會使我消失。

然而我不願意徬徨於明暗之間，我不如在黑暗裏沉沒。

然而我終於徬徨於明暗之間，我不知道是黃昏還是黎明。我姑且舉灰黑的手裝作喝乾一卮酒，我將在不知時候的時候獨自遠行。

嗚呼嗚呼，倘若黃昏，黑夜自然會來沉沒我，否則我要被白天消失，如果現是黎明，朋友，時候近了。

我將向黑暗裏徬徨于無地。

『語絲』週刊第4期より